

第8章 古地理

多摩川低地における10 ka以降の古地理は、基準コアにおける堆積相とその岩相とN値の断面図における形態、そして126点の堆積年代と海水準変動曲線の対比による古水深に基づいて復元できる(第8.1図)。

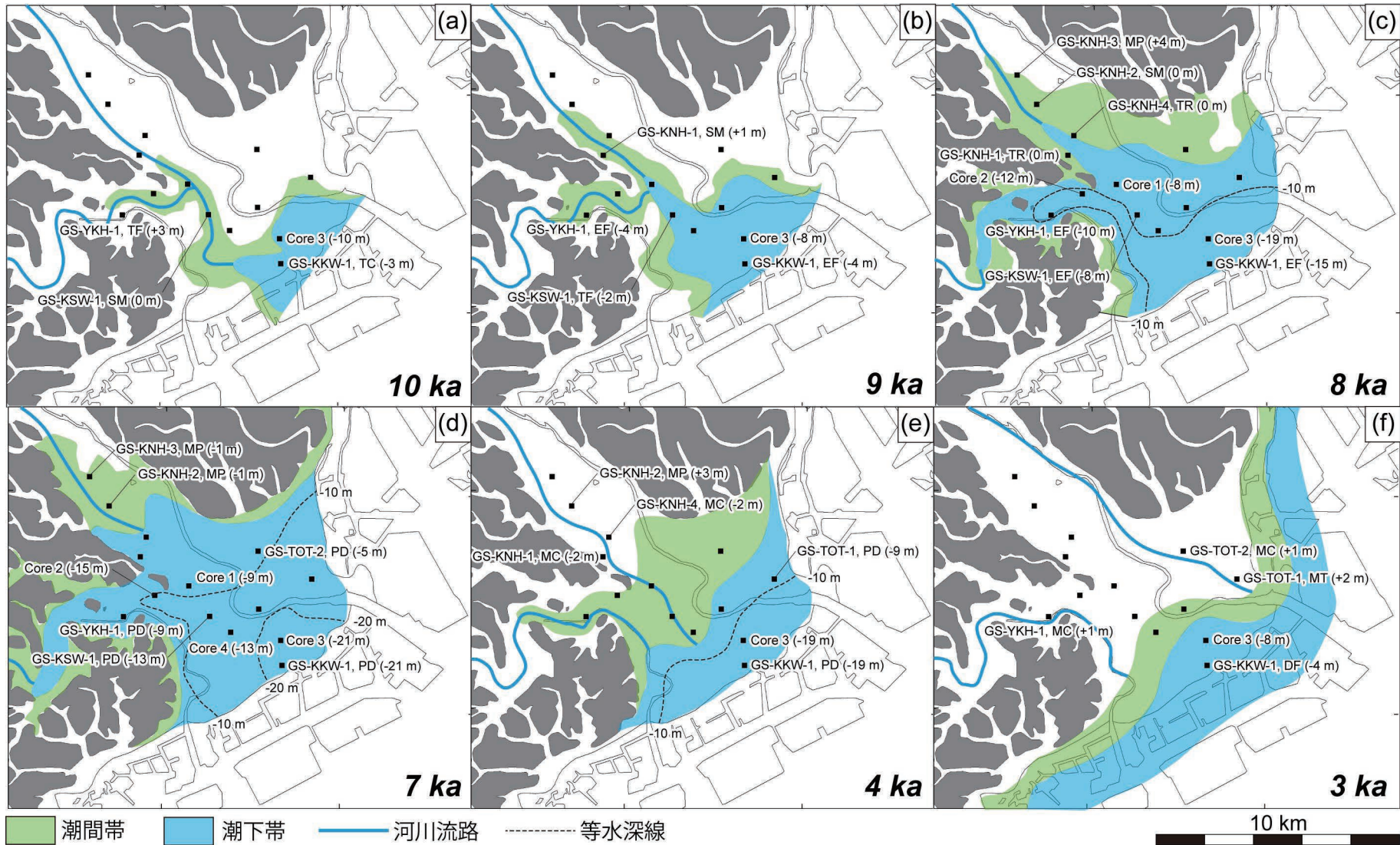
LGMの極相期(20.5 ka)に多摩川開析谷には礫質網状河川、鶴見川開析谷には上総層群を侵食する河川が分布した。LGM以降の海水準上昇に伴い、これらの地域には塩水湿地とそれに局在する網状河川堆積物が侵入した。本調査地域において最初に塩水の影響が出たのは、GS-KKW-1地点における11.2 kaである。それ以降、8 kaにかけて塩水湿地、エスチュアリーフロントの順に海域が内陸へと侵入した(第8.1図 a, b, c)。

8 kaにGS-KKW-1は水深15 mの海底下にあった。また、GS-KNH-1とGS-KNH-4には潮汐河川が分布した。そのため当時の河口はラップ状の形態を有したと考えられる。7 kaに多摩川低地における海水準は高頂を迎えた(第6.4図)。この時期、最も内陸に位置するGS-KNH-3では、標高2.8 mにかけて海生と汽水生の珪藻化石と植物根が混在して産出する(第6.1図、第6.3図；塩性湿地堆積物)。従って、7 kaの塩水湿地は8 kaよりもさらに内陸まで広がったことが示される(第8.1図 d)。GS-KNH-1では、当時、上方粗粒化する砂礫層から構成されるデルタが既に発生していた(第6.5図)。このデルタは主に水中で前進し、その形態はローブ状であったと考えられる。なお、7 kaにはGS-KKW-1などの沖合においても水深が最大で21 mに増加した。従って、堆積システム全体として見た場合、8～7 kaにかけて海進が進行したが、河口の水中においてのみ

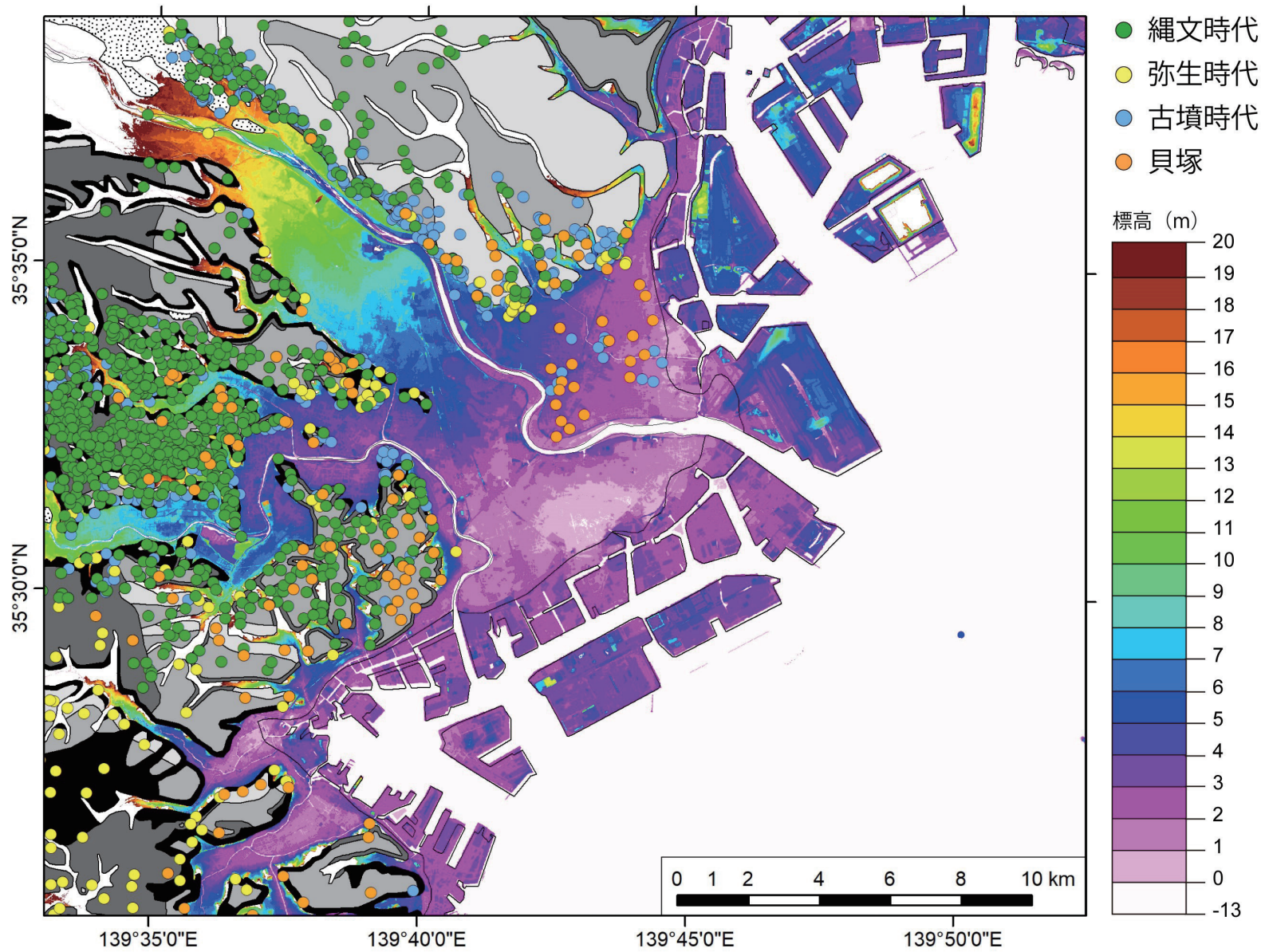
局所的にデルタが発生・前進していたことが示される(第8.1図 d)。このようなデルタは、水中においてのみ前進したという点から見れば、上げ潮三角州と類似する(Reinson, 1992)。

海水準高頂は4 kaにかけて継続した(第6.4図)。4 kaにおける古地理は、デルタの表層が後の時代の河川チャンネルによって削剥されているため、その詳細は不明である。しかし、この時期にGS-KKW-1にはプロデルタ堆積物が堆積し、GS-KNH-2には現世の氾濫原堆積物が堆積していたことから、勾配の極めて緩いデルタが累重的に前進していたことが推察される(第6.5図)。このようなデルタでは、下流から上流の広いエリアにわたって碎屑物が堆積していたことから、堆積速度は小さかったと考えられる。7～4 kaの堆積速度が多くのコア地点で小さい(第6.4図)のは、このような理由によると考えられる。また、このデルタは、勾配が緩いことから、その前面に広い干潟を形成していたと考えられる(第8.1図 e)。

3 kaにかけた海水準の低下に伴って、デルタの表層は河川チャンネルによって削剥され、その前進が顕在化した。当時、GS-TOT-1やGS-TOT-2は既に陸化しており、GS-KKW-1は水深が4 mのデルタフロントの環境にあった。従って、この時期には現在の多摩川に沿ったローブが形成されていたと考えられる(第8.1図 f)。この多摩川の北部に分布するローブは、多摩川の南部の沖積低地よりも標高が2 mほど高い。このローブには古墳や平安時代の貝塚が立地しており、その離水年代が南部と比べて古かったことを示す(第8.2図)。



第 8.1 図 10 ka から 3 ka までの古地理変化
ka は千年前を意味する。カッコ内の数字は古水深を示す。



第 8.2 図. 遺跡分布.
遺跡分布は奈良文化財研究所 (2021) に基づく. 第 2.5 図の地盤高に重ねた.
背景図は国土地理院 (2021) の 5 m DEM を用いて作成した.